

バースデー

「今日も来たんだね」

僕は言った。風呂上がりにベランダの窓を開けて、ビール飲んでいたら妹がやってきた。妹は何も言わずに、僕の隣に座った。妹は十歳の女の子だ。

煙草に火をつける。妹は何も言わない。

妹はもう何年も同じ姿だ。そして、あの日から声を聞いたことがない。十歳のときに死んだときから。でも、妹は現れるだけで、何も話さない。死んだあと、初めて僕の前に姿を現したときからそうだった。思い返すと、そのときも驚くことはなかった。そういうものだと受け入れていた。なぜだかはわからない。

今の彼女の存在を考えたことはもちろんある。幽霊なのか、単に僕の妄想力が作り出したものなのかなんなのか。でも確かめようがないからある日、考えるのをやめた。悪さをしてこないし、害にはならないから。客観的に見ればおかしなことだということはもちろんわかっている。

煙草の灰が落ちた。

その日もしばらく僕の傍にいて、知らない間にいなくなっていた。

僕は妹のことを誰にも言ったことがない。というのは嘘で、やっぱり親に言った。でも、失った事実と向き合っている最中と考えて、慰められただけで信じてはもらえなかった。それがきっかけで、僕以外、妹のことは見えない存在と気づき、誰にも言うことをやめた。

その後、誰にも言わない日が続いたけど、大学生のとき、付き合った女の子にも言ったことがある。信じてもらえたのかどうかはわからないけど、受け入れてはくれた。別れた理由が妹ではないと思うから。確信は持てないけど。

その頃は、すでに今のようにな女性のような格好をしていた。客観的に見ると、そんな人物に好意を持つのは不思議だと思う。でも、そういう人物に好意を抱く人は一定数いる。これは経験則。美術大学という特殊な環境に身を置いていたから、そういう人の比率が高かったのかもしれない。

断っておくけど、僕は同性愛者ではない。というよりも恋愛感情というものを抱いたことがないのではないかと思っている。ただ、恋愛感情というものを知りたくて、何人かの

人と恋人になり、セックスをした。付き合った人に抱いた感情は尊敬であっても、人や小説やマンガが言う恋愛感情とは全く違う。そもそも確かめようがない。妹が幽霊なのか、僕の妄想なのか、なんなのか確かめようがないのと同じように。

何の音楽を聞いているのだろうか。

僕は満員電車が嫌いだ。幸運にも朝起きることは苦ではない。だから、いつもラッシュを避けて早い時間帯の電車に乗る。

今日は目の前にヘッドホンをつけて眠っている男を観察している。どよーんとしている。飲み過ぎたのだろうか。緊急事態宣言が明けて、ひさしぶりの朝帰りなのだろうか。

ふいに高校時代にヘッドホンをいつもつけていたクラスメートのことを思い出した。首にかけていたのではなく、いつも耳につけていた。さすがに授業中は外していたけど、正確に言うと、何度かつけていたものの教師に注意され続けて、ある日、授業中はつけなくなった。注意されることは、病気とかじゃないんだなと思ったことを憶えている。その裏にどんな取引があったのかは知らない。停学を仄めかされたのかなんなのか。

そのクラスメートは、やっぱり誰とも話さなかった。そして、学校を一度も休まなかった。なぜ、そんなことを知っているかと言うと、僕も同じで、皆勤賞だったからだ。

僕は高校生のとき、女性の格好をしようと決めた。

私服の学校だったので、僕は今と変わらず、女性の格好をしていた。3年間、いつも月は僕の周りに人がいた。目立つからだっことは自覚していた。でも、すぐに離れていった。僕が気のない返事しかしないからだ。とは言え、学校で僕はそこそこ有名人だった。もちろんヘッドホン君も同じだ。無理もない。

いじめはなかった。正確に言うと、それらしいことはされた。僕はそうなることは覚悟していたから、とりあえず主犯格を馬乗りになって何発か殴った。次の日からいじめはなくなった。代わりに無視をされることはなかった。

電話を乗り換えていたとき、クマがこちらを見ていた。このクマは誰も傷つけないことを知っている。毎日あそこに立っている。

「おはよう」と僕は言う。

「いつてらっしゃい」とクマは言う。

悪い朝じゃない。

髪の毛とまつ毛以外は脱毛しようと思ったのは二年前。財布と相談しながらエステに通っている。薄い方だと聞かされる。メンズエステに行っただけで、僕みたいな人は多いですかと聞くと、お客さまみたいな人は多いですよと言われた。

女装子の人のことなのか性同一性障害人のことなのかそれとも違う人なのか。僕みたいな人は大勢いるけど、どこにいるのかわからない。興味がないからいいんだけど。

最初は髭にした。次は足。スカートを着たかったから。脚線美は難しい。僕はふくらはぎと足首のバランスにこだわりがある。というより、ふくらはぎの筋肉が歩く時に浮き出る所を見るとうれしくなる。特に女の人のそれを見ると、この人は昔運動部に所属してたんだろなと思いついて、バドミントン部っぽいとか想像するのが好き。一度ついた筋肉は寝たきりにでもならないとなかなか落ちないだろうと思う。贅肉と違って増えることはないだろうけど。

あつ、ふくらはぎは生でもタイツとかパンストとか越してもいい。そして、足首がキュッとなっているのが条件。だから男の人にはなかなかいない。足首が太いかふくらはぎの筋肉がつきすぎてる人がほとんどだし、大体長ズボンだから見えないというのものもある。

仕事はデータ入力。絵を描いて生きたいと思ってるけど、絵だけの収入だけではとてもじゃないけど喰べてはいけない。だからバイトをしてる。

入力する数字や文章の意味があるのかどうか。僕の格好に誰も文句も興味本位の声もあげないからそんなことは気にしない。みんな黙々とキーボードを叩いている。

「死んじやだめだよ」とトイレですれ違ったとき僕は彼女に思わず言う。僕はそういう人を見ることできる。

一緒にワークスペースで斜向かいで仕事をしている女性だ。大学生ぐらいだろうか。眼鏡をかけている。彼女は死のうとしている。それを実行するかどうかは彼女次第だから何とも言えないけど。

彼女は何も言わずにどこかへ行つた。それ以上は僕も何もしない。死ぬのは勝手だと思うけど、目の前で死なれては寝覚めが悪い。だから僕はそういう人を止める。それだけ。

そして再びパソコンのキーボードを打ち込む。カタカタと言う音だけが辺りを支配する。カタカタカタカタ。

時折、エンターキーの音。

パツパツパツ。

何か音楽が生まれそうだ。

帰りの電車を待っている時、トナカイが職員の部屋から出てきた。どうやらクリスマスマス  
イブらしい。何か袋を下げている。プレゼントにしては小さな袋。最近のトナカイは電車  
移動なんだろうか。

街は年末シーズンで賑やかだ。ふと、あのトナカイたちはマスクをしていないことに気  
づいた。もしかやサンタも？ 去年は確か、マスクをしていたはずだ。サンタがウイルスを  
広めることもあるだろう。去年はワクチンを打っていたのだろうか。今年もワクチンを打  
っていないのだろうか。でも、そんなことを気にする人はもう少ないだろう。マスクを  
している人はちらほら見かけるだけだ。しかし、電車にはサンタの姿は見えない。サンタ  
の帽子をかぶった酔っ払いはいたけど。  
なんだか嫌な気分になってきた。こういうときはさつきと家に帰ろう。

そして、どこか遠くに行こうと思った。

車に乗って。

で、高速道路で渋滞に巻き込まれた。今年は帰省する人や旅行に行く人が多いようだ。  
嫌になる。

夜の中を流れるテールランプは好き。たまに画像とか映像が出てくる、あれ。でも、つ  
いたり消えたりを繰り返すだけじゃおもしろくもなんともない。煙草は一日五本までと決  
めているのに思わず六本目に火をつける。仄暗い車内に小さな火が浮かぶ。窓を開けると、  
音が入ってくる。車の中にいる人のため息まで入ってきてそう。

一時間かけて一番近くのパーキングエリアに到着。七本目の煙草を吸って、うどんを食  
って、八本目煙草を吸って帰った。

帰りの車の中で声がした。

「どこかへ行くことはできても、どこかへ行けるわけじゃない。問題はどこがどこなのか  
を知ること」

誰の言葉？

私の言葉。

初めて口を開いた死んだ妹が言った。

私への悔恨？

何が？

女の格好してるの。

僕はしばらく考えてから、

趣味だよ。

と答えた。

時々思う。自分が妹になっていたかもしれないということ。でも、女装をしていることと妹の死が結びつくような物語にはしたくない。そんな物語はいくらでもある。でも、誰かの描いた物語の中で僕を語ってほしくない。問題はどこがどこなのかを知ること。でもまだわかりそうにはない。

そういえば、明日は僕と妹の誕生日だった。